

然

六 自然の災害

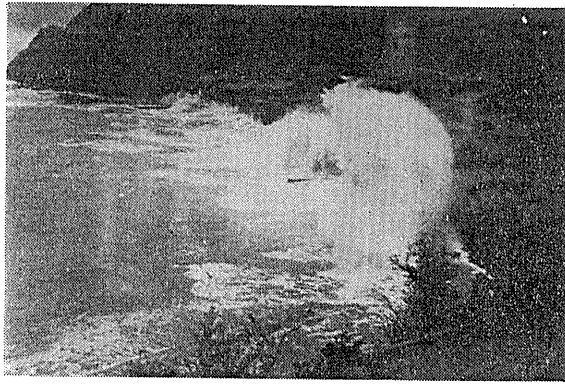
1 概況

自

本町は、地勢がけわしくて平地に乏しく大部分が山地であり、ほとんどの河川が流路は短くかつ急こう配のものが多いため、降雨時の出水は急激で被害を受けやすい。加えて、台風銀座ともいわれる豊後水道に面しているの

自然

中之浜海岸の激浪状況



台風15号 (昭和29年9月25~26日)

災害資料の豊富な昭和九年以降二四年間の県統計をみると、災害高はまれに起こる猛台風によるものが圧倒的に多い。まず死者について見ると、全死者数八五六名の内、その半数は昭和一八年七月台風、昭和二〇年の枕崎台風、および、昭和二四年のデラ台風の三個によるものである。また、全壊家屋八二一九戸の内半数は、昭和一八年の七月台風、昭和二〇年の枕崎台風、昭和二六年のルース台風に起因するものである。この事実により、台風災害が、気象災害の内でも、いかに重要な位置をしめているかがよくわかる。

愛媛県統計年鑑により年間平均災害額を計算してみると、土木関係被害が二八億円、農用固定資産関係が八億円、農作物関係が一五億円程度と推定され、この外家屋、船舶の被害を加えると、全額六〇億円前後と推定される。(三五年現在) これは、愛媛県の年間総所得額の約六割におよぶもので、非常に大きな損失である。県が昭和二二年から昭和三六年に至る一五年間に、災害復旧に要した事

2 台 風

台風災害は最も多く、愛媛県に災害をおよぼす台風の経路は、主として西日本を通過したものである。しかし、西日本を通過した台風の全部が大災害をおよぼすというわけではなく、昭和一五年から昭和三〇年の間に西日本を通過した台風は、全部で四七個であったが、愛媛県に災害を与えたのは二六個で、前者の五五%であった。(町の災害関係記録と統計が乏しいので以下県資料でみる)

気 象 災 害 表

期 間 (西暦)	年 数	台 風	%	豪 雨	%	豪 雪	%	干 ば っ	%	計
1632~1851	220	25								25
1852~1861	10	0	—	2	100	0	—	0	—	2
1862~1871	10	3	50	1	17	0	—	2	33	6
1872~1881	10	3	43	2	29	1	14	1	14	7
1882~1189	10	10	71	2	15	1	7	1	7	14
1892~1901	10	7	44	5	33	0	—	3	23	15
1902~1911	10	6	50	4	34	1	8	1	8	12
1912~1921	10	7	41	6	35	3	18	1	6	17
1922~1931	10	6	35	4	24	3	18	4	23	17
1932~1941	10	9	60	4	27	0	—	2	13	15
1942~1951	10	18	72	3	12	2	8	2	8	25
1952~1960	10	17	45	9	23	6	16	6	16	38
1961~1963	3	3	26	7	58	1	8	1	8	12
計	(333) 113	(114) 89	55.6	49	239	18	8.8	24	11.7	205
10年間平均 発生件数		7.9		4.3		1.6		2.1		
生起年確率		1/4		1/8		1/8		1/6		

長大な海岸線は、連年の台風や豪雨によりじりじり大きな被害を受けている。本町が被災したと想定される自然災害件数二〇五件のうち、台風によるものが一一四件で五五・六%、被害高は全体の八〇%以上に及んでいるが、ほとんど毎年のように大小さまざまな災害を受けている。今その件数の統計を見ると上図のとおりである。

これによると、台風による気象災害件数が最も多く、一〇年間に七・九回の割合となっている。次いで豪雨・干ばつ・豪雪の順となっている。もっとも、規模の小さい大雨、大風は毎年数回あり、全部を災害件数に算入すれば、非常に多くなるが、ここではこの種の小災害と地震については省略した。なお台風記録に比較して、豪雨、豪雪、干ばつ等の記録は古い年代のものが少ないので一八五二年以降について災害件数を記載した。

業費の総額は、国庫補助、県市町村単独工事を合わせて一六六億円を越え、これに昭和二〇年、二一年災害を加えると、実に二〇〇億円の巨額に達している。

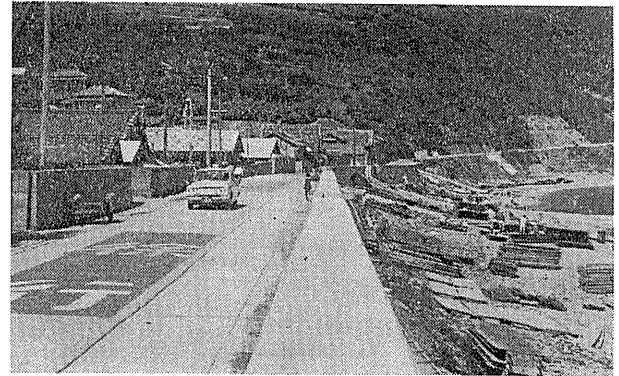
昭和二四年のデラ台風被害の惨状は、加周海岸でも見られる通り、国道一九七号線（当時の県道八幡浜三崎線）は激浪により破損流失し、漁船・漁具等の大破した残骸が山積しており、来襲した台風がいかに猛烈をきわめたかがよくうかがわれる。

台風被害の加周海岸



デラ台風（昭和24年6月20日〜22日）

現在の加周海岸



現在国道197号線

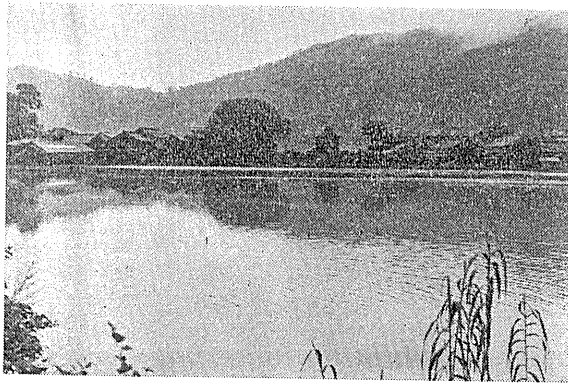
### 豪雨

豪雨は、台風に次ぐ発生件数を示し、全気象災害のうち、二三・九％で一〇年間平均発生件数は四・三回となつて、本町災害中の第二位を占めている。

被害状況の資料が乏しいので詳細なことは考察しがたいが、農業用公共施設・農業用固定資産・農作物等の被害じん大であったようである。町見郷土誌に明治九年の大洪水による損害の一部が摘録されているが、これが本町で一番古い記録である。

町内で二級河川指定を受けているのは伊方大川（両岸平均流路長三・二キロメートル）伊方新川（同一・八キロメートル）・九町新川（同一・四キロメートル）の三河川で、流路はきわめて短い。伊方大川水系をみても、幹流大川に流入する支流はきわめて多く、集中豪雨時には急激な出水のため、堤防が決壊し、大被害が繰り返されて今日に至っている。この他に藩制時代から公共管理されている慣行河川（現在県管理）が七八もある。そのうち、地すべりと河川砂防の指定を受け災害復旧や砂防工事を施行したものに、小中浦、湊浦「寺川」・川永田「大谷川」・九町「新川」があり、また、地すべり対策工事施行地区には「大浜」・「中浦・小中浦」・「九町浦安」がある。

降雨量等については別表資料を参照されたい。



水田冠水状況（九町沖田）

自然

## 4 千 ば つ

千ばつは、全気象災害発生件数のうち、一・七%で一〇年間平均発生件数は二・一回となり、災害中の第三位を占めている。

近来、特に大きな被害をもたらした千ばつは、昭和九年と昭和三年のものである。昭和九年の千ばつについては「六〇年来の千ばつ」といわれ、伊方村記録によると、農作物にじん大な被害があった。このときの千害対策について、西宇和郡町村会では、次の一項目にわたる陳情書を国と県へ提出している。

- (一) 被害調査と救済助成金の交付。
- (二) 干害地の地租および地租付加税および特別地税の減免。
- (三) 干害地救済のための救農土木事業の実施。
- (四) 政府米を干害地に特に安価払下。
- (五) 干害地救済および干害防止設備に特別低利資金を融通。
- (六) 桑園整理補助金の増額と養蚕業者に対し干害救済助成金の交付。
- (七) 干害地に肥料購入補助金の交付。
- (八) 低利資金の償還年限の繰延べ。
- (九) (十) (十一) 各種補助金等(省略)

また、昭和三年の千ばつには、農作物被害額五五、八一五千元(甘藷三三〇ヘクタールの二〇%が収穫皆無、水稻四一ヘクタール、みかん五一ヘクタール、夏かん七二ヘクタール、など被災)となり農家の困窮の実状を国・県に対して陳情しており、その内容を摘録すると、一、失業対策事業の枠を大中に増加。二、公共事業(工事)の

## 自 然



当時の新聞スクラップ集録 (昭和33年千ばつ)

繰上施行。三、生活保護法適用による救済措置。四、県外就労(出稼ぎ)先のあっせん。五、課税減免。六、地方交付税の増額(以下省略)等となっており、西宇和町村会の対策陳情は(前項重複分省略)。一、被害農家に年三分五厘の低利融資あっせん。二、略。三、作付転換の種子無償配布。四、甘藷の最低価格引上げ等が要請されており、年代差はあっても昭和九年と三三年の要望内容が酷似している点が注目される。また記録によると動噴三九台、揚水ポンプ八台、井戸二十五ヶ所、エスロンパイプ、ホース約三万メートルなど、農家の千ばつ対策に使った経費は約九七五万円であり(この頃から畑地かん水に機械類が使用されはじめた)。町内では、「段々畑農家を救え」をスローガンに千ばつ危機突破農民大会を八月一三日午後二時から伊方小講堂で開き、農民代表が集い、九項目の要望事項を満場一致で決議した。

また八月一日午前五時から八幡神社で町長が祭主となり雨乞い祈願祭をもよおした。昔から千人踊りをすればふしぎに雨が降るといわれているので、延四千人の町民がくり出し、カネ・大鼓で踊り、血と涙の叫び天までとどけと「雨をたあもれ、龍王堂、龍王堂がやけるぞ、焼てこげてしまおうぞ」と終日千人踊りを行った。

近年は柑橘栽培の発展により千ばつの際には機械かん水が盛んとなり、水不足対策として大型貯水槽や地下水利用のさく井が行なわれている。

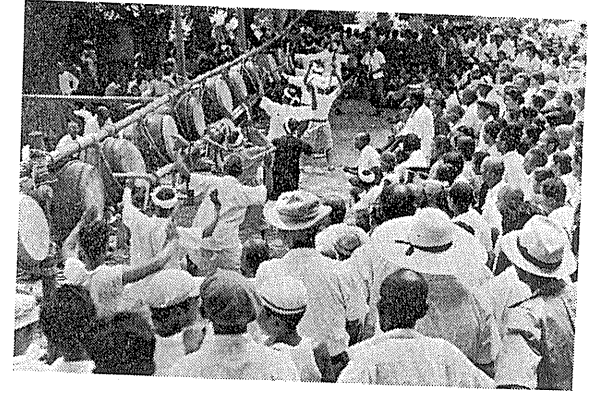
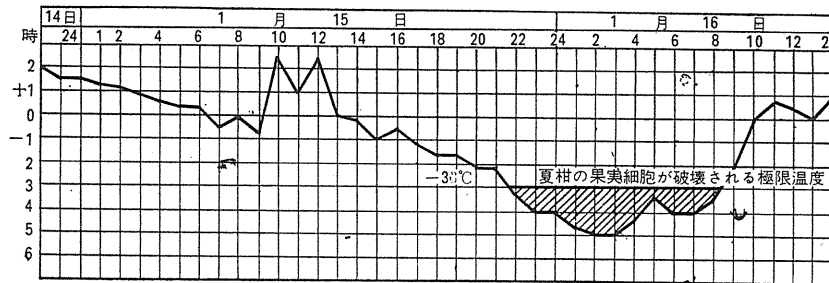
自然



昭和36年の大豪雪 (湊浦)

に近年は件数が多く、夏柑をはじめ、農作物の被害はじん大なものがある。  
(別表参照)  
なかでも昭和三五年一月二十九日に降り始めた雪は、翌三六年一月四日まで降り続き、本町最深積雪五二センチメートルとなり、まれにみる大雪であった。このために、一月三十一日から海陸の交通は全く杜絶し、一月三日から一部開通、五日平常にもどるといふ雪の正月を迎えた。また、昭和三八年一月の豪雪と低温は、夏かん等に大打撃を与えた。本町の被害額(主として夏柑)は七〇、〇〇〇千円にのぼり、天災融資法の適用を受けた。

昭和38年寒害の自記温度計による最低気温表 {伊方町農協青果部記録} {伊方町川永田標高310m}



雨乞い千人踊り (昭和33年干ばつ)



枯死寸前のさつまいも畑 (昭和33年干ばつ)

5 豪雪

豪雪は、全気象災害発生件数の八・八%、一〇年間の平均発生件数は一・六回となっており、災害中の最低で第四位である。

降雪についての古い資料が乏しいので、明確でないが、南国といわれる当地でも、たびたび大雪に見舞われ、特

自然

## 台風記録 (西暦 1632~1963)

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
寛永	9. 8. 6	6日大風のため正眠院山門倒潰 日本気象資料(宇和郡沿革史)	1632	—	
承応	1.	承応元年大風農作物被害 愛媛県農業史(宇和島藩御年譜微考)	1652	20	
寛文	6. 7. 4	前代末聞の大風被害 伊予風水害小史(宇和島吉田両藩誌)	1666	14	
延宝	2. 8. 17	8月17日台風殺倒、家を破ること4200余、破船170、死者5人、田畑の損害はなほは多し 伊予風水害小史(宇和島御記録)	1674	8	
延宝	4. 7. 8	3.4日風雨 御荘田地流れる 日本気象資料(南宇和郡史)	1676	2	
延宝	6. 7. 18	伊予の地18日の大風雨にて堤防255間、塩浜286間、新田堤86間破れ民屋293軒倒る 日本気象資料(徳川実紀)	1678	2	
延宝	6. 8. 5 6	伊予の地この5日6日の風雨にて堤防278間、屋舎277戸転覆 日本気象資料(徳川実紀)	1678	2	
延宝	7. 7. 10	大風雨、御荘村々井手川際不残被害 日本気象資料(南宇和郡史)	1679	1	
元禄	2. 7. 17	7月17日風雨洪水618戸破れ3人死す。損耗7,700俵免租 伊予風水害小史(宇和島御記録抜書)	1689	10	

## 6 地震と津波

地震は、その震度によって異なるが、愛媛県における地震・津波の記録は少なくない。しかし、伊方町では、地震や津波の記録は乏しく、被害の記録も少ない。

最近の地震では、昭和二十一年二月二日の南海道地震があるが、本町では大きな被害はみられなかった。また、津波では、昭和三十五年五月二四日のチリ沖地震による津波があるが、本町には被害はなかった。(別表資料参照)

## 7 資料

本編の執筆にあたっては次のような点に留意した。

- (一) 風・水・干・雪害・地震に分類して、風害は寛永九年(一六三三)以降三三三年間、水害・干害・雪害については安政四年(一八五七)以降一〇七年間、地震については推古天皇一三年(六〇五)以降一三五九年間の気象資料および地震資料を年代順に配列した。
- (二) 台風の中心気圧、すなわち中心示度は天気図上にあらわれた最低のものを採用した。なお、昭和二〇年以降の相つぐ台風災害のうち被害の少ないものは省略した。(昭和二〇年までは耗と略記し、昭和二一年からはミリバル。ただし、一気圧は七六〇ミリで、ミリバルの単位になおすと一〇一三ミリバルとなる)
- (三) 震災・霜害・降雪・冬季大風などは比較的災害軽微とみて省略した。
- (四) 地震については震度四以上のうち被害があったもののみ別表で示した。

## 自然

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
安永	3. 9. 1 2	9月1、2日大風洪水（高松藩風津波の記録あり） 伊予風水害小史（宇和島御記録）	1774	12	
天明	2. 8. 20	8月20日 風雨洪水、損耗38,000余石、死者3人 伊予風水害小史（宇和島御記録）	1782	8	
天明	6. 8. 29	8月29日大風高潮 伊予風水害小史（宇和島覚書）	1786	4	
寛政	11. 8. 18 19	8月18日19日暴風雨、損耗52,000石 伊予風水害小史（宇和島覚書）	1799	13	
享保	1. 8. 19	19日風雨増水 損耗20,759石 日本気象資料（東宇和郡沿革史）	1801	2	
文化	1. 8. 29	8月29日暴風雨 破家 1,712、死者14、死牛馬18、損耗70,000石 伊予風水害小史（宇和島覚書）	1804	3	
弘化	3. 7. 9	7月9日曉より風起り昼に至りて激じん、倒家破船折木拵げて救うべからず更に未曾有の風速にて惨憺を極む。世に之を千年の大風という。 伊予風水害小史（宇和島覚書）	1846	42	
慶応	2. 8. 7	8月7日（9月15日）風雨洪水 宇和島覚書	1866	20	
明治	3. 10. 1	10月1日暴風雨被害多し。吉田藩内の落雷 157箇所溺死8人 東宇和郡沿革史	1870	4	

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
元録	7. 5. 17 18	閏5月17、18日強風洪水損耗 616町 壊家 240軒、破船 6隻 伊予風水害小史（伊達家事記）	1694	5	
元録	13. 7. 22	7月22、23日大風雨、壊家632、破船10 損耗12,000石 伊予風水害小史（宇和島御記録抜書）	1700	6	
元録	15. 8. 22 23	宇和島8月22日之亥刻より翌23日迄風雨破損元覚城下並在々道家 632軒、破損家敷下知破船10艘 日本気象資料（南予史）	1720	2	
元録	16. 8. 18	18日風雨殺倒 田畑14,430石損耗 家屋 366軒崩壊、死者3人 日本気象資料（東宇和郡沿革史）	1703	1	
宝永	4. 8. 19	8月18、19日烈風雨海嘯あり、損耗米2万石 倒壊家2,300 流死17 伊予風水害小史（宇和島御記録抜書）	1707	4	
正徳	2.	大風雨 伊予風水害小史（加藤家譜）	1712	5	
享保	14. 9. 10	9月10日風雨激し、損耗45,000石、吉田領特に甚し 伊予風水害小史（伊達家事記）	1729	17	
寛延	1. 9.	9月2日～17日大風雨損害おびただし、宇和島領内へ2,000両救助 伊予風水害小史（東宇和郡沿革史）	1748	19	
宝暦	12. 6. 26	26日暴風洪水損害多し、殊に城下は60年来の大雨にて猪鹿等も溺死す 日本気象史料（東宇和郡沿革史）	1762	14	



## 自然

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
明治	19. 9.10	10日沖繩附近より北東に進み九州南東部より豊後水道および広島西方を経て11日日本海に出る。(風水害あり、大洲弘川水位32.4尺) 愛媛県誌稿	1886	1	大浪、船多く破ぶる。 町見郷土誌(阿部記録)
明治	22. 8.19	(734耗以下) 台風は 19日6時室戸岬南西方に達し、北進して14時には四国中部に21時には岡山の北方に転じた(相当に風雨の模様) 愛媛県史概説	1889	3	
明治	23. 9.11	台風(750耗) 11日 台風は九州南東部を通過し、愛媛県三崎半島に上陸、東に進み、香川県に入り、北上して日本海に去った。 愛媛県史概説	1890	1	(注) この年1月1日松山地方気象台(松山測候所) 創立観測開始
明治	24. 9.14	台風(710耗) この 台風は13日奄美大島の北部14日九州の西部を経て、北東に進み日本海に去った。県下では南よりの風が吹き、南予では風水害が大きかったと考えられるが、被害状況不詳 愛媛県史概説	1891	1	14日降水量 宇和島 222mm
明治	26.10.14	台風(720耗) この 台風は14日朝九州南部に達し、豊後水道の南部を経て15日四国沖を南東方に去った。四国地方の被害甚大であった。東予の地特に甚し。両陛下片岡侍従を差しつかわし視察させらる。 愛媛県誌稿	1893	2	宇和島総降水量 192mm
明治	27. 9.11	台風(730耗) この 台風は10日沖繩の東方より九州の南部に達し、11日3時宮崎9時松山を経て北東に去った。 愛媛県誌稿	1894	1	松山最大風速SW 11.7m/秒 松山総降水量 175mm 九町漁港大防止破壊 (町見郷土誌)

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
明治	3.10.12	10月12日四国大風雨 日本気象資料	1870	4	
明治	7. 8.19 7. 8.21	8月19日愛媛大風雨 日本気象資料 8月21日愛媛大風雨 日本気象資料	1874	4	7.5大浪大風大雨にて被害多し 町見郷土誌(阿部実蔵氏年代諸相場控簿)
明治	13. 9.15	9月15日予讃両国に大風水害あり惨状を極む 愛媛県誌稿	1880	6	
明治	14. 7.14	大浪大風大雨にて漁船破壊 いりこせいろ 200枚流出 町見郷土誌(阿部記録)	1881	1	
明治	15. 8.15	8月5日四国暴風洪水 日本気象資料	1882	2	
明治	16. 4. 4 16. 9.10 16.10.12	4月4日愛媛県暴風 日本気象資料 9月10日四国大風雨 日本気象資料 10月12日四国大風雨 日本気象資料	1883	1	
明治	17. 8.25	(720耗) 台風は 25日午前沖繩の西方より高速度で北東進し九州北部を通り鳥取県境港附近より日本海に出た。(被害瀬戸内海に多し) 愛媛県誌稿	1884	1	大浪にして浜通路なし 居室4軒倒れ流出、小艇網一帖流失 町見郷土誌(阿部記録)
明治	18. 6.17	6月17日暴風雨のため嘉喜尾村小学校大破す 東宇和郡沿革史	1885	1	



自然

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
明治	38. 8. 16 17	台風(740号) 16日朝 奄美大島の北西海上にあり北東に進み10時熊本付近に上陸し、九州北部を通過し、17日朝広島を経て若狭湾に入る 愛媛県史概説	1905	3	宇和島降水量 105mm
明治	40. 7. 18	台風(730号) この台風は18日四国南方に接近、同日午後四国西部を横切り、内海に入り19日対馬海峡に入る 愛媛県史概説	1907	2	
明治	42. 8. 6	台風(740号) 5日 紀州沖を通過、6日九州中部を横断し東支那海に出る。宇和海は相当にしける。漁船被害あり 愛媛県史概説	1909	2	大暴風雨 町見郷土誌 (阿部記録)
明治	43. 8. 30 ~9. 7	大南風 大雨 町見郷土誌(阿部記録)	1910	1	
明治	44. 8. 15 16	台風(720号) 15日6時 大隅半島に上陸、豊後水道を通り宇和島付近に上陸し、四国を斜めに横切り、16日10時若狭湾より日本海に出る。本県では降水量は東予に多く、平地で150mm山岳地方で400mmを観測し、海上は大しけでかなりの災害を受ける。 愛媛県史概説、気象台資料	1911	2	最大風速新居浜S W 22.8m
大正	1. 9. 21 22	台風(720号) 22日夜 高知付近に上陸、神戸、若狭湾を経て日本海に出る。本県では風雨ともに強く、東予では平地の降水量350mm山岳部で500mmを越し大災害を受く。 愛媛県史概説 気象台資料	1912	1	最大風速四阪島 NNW 34.1m 9.22大風、大雨、 大浪近年になし家 屋人畜作物に被害 多し。 町見郷土誌(阿 部記録)

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
明治	28. 8. 25	台風(720号) この台風は24日夕刻九州の南部に上陸25日にかけて九州西部を北上し、日本海に去った。このため雨予に風水害あり。 愛媛県誌稿	1895	1	宇和島総降水量 210mm
明治	29. 8. 18	台風(720号) この台風は18日豊後水道沖より足摺岬に上陸し瀬戸内、松江附近を通り日本海に去る。県下全般に暴風雨に見舞われ被害多し。 気象台資料、愛媛県史概説	1896	1	松山最大風速 11.6m/秒 八幡浜総降水量 150mm
明治	30. 9. 29	台風(720号) この台風は29日九州南西沖に至り、九州北部を横断して内海に入り、東進して大阪方面に去る。降水量県下全般に150mm以上 愛媛県史概説	1897	1	松山最大風速NW 52m/秒 松山総降水量 153mm
明治	31. 8. 29 ~9. 2	台風(750号以下) 2個の台風が8月29日および9月2日相次いで九州南部より愛媛県を通り北東に去る。このため総降水量は雨予で200mmから400mm(以下省略)被害があったと考えられるが詳細不明 愛媛県史概説	1898	1	
明治	32. 8. 28	台風(720号) 台風は28日朝奄美大島の東南東より漸次北東に転向し、高知、愛媛、香川を荒し、中国地方を経て29日日本海へ出る。(新居郡国領川堤防決壊、溺死者100余人等々) 気象台資料 愛媛県史概説	1899	1	最大風速NW 20.7m 7月25日大雨大風 大浪、波止いたむ 町見郷土誌(阿 部記録)
明治	35. 9. 8	台風(730号) 7日 四国沖に接近し、同夜22時宮崎付近に上陸、そのまま北に進んで日本海に出る。県下全般に暴風雨に見舞われた。 愛媛県史概説	1902	3	松山最大風速SE 10.7m 新居浜 " ESE 21.4m

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
大正	10. 7. 13	台風(740耗)12日朝高知に上陸、以後四國を横断して日本海に出る。県下は12日夜から13日にかけて暴風雨となり降水量は東予で150mm内外、他は100mm以下。海上および沿岸では風力強く、帆船の転覆河川のはん濫、家屋の倒壊などかなりの被害が出た。 愛媛県史概説	1921	1	最大風速四阪島 WSW 29.2m  (注) 宇和島測候所大正11年4月15日業務開始する。
大正	12. 6. 23	台風(740耗)20日石垣島に達し、北西に進みここより進路を東北東に曲げ、22日瀬戸内海および沿岸では船舶の遭難するものあり。 愛媛県史概説	1923	2	最大風速宇和島 SW 17.8m
大正	13. 9. 11 12	台風(745耗)11日東支那海に出て、進路を東に転じ瀬戸内海に入り12日東海道方面に去る。瀬戸内海および沿岸では暴風となり死者住家倒壊、船舶の沈没流出る。 愛媛県史概説	1924	1	最大風速宇和島 SW 19.6m
大正	14. 9. 17 18	台風(740耗)17日夜九州北部に上陸し、18日瀬戸内海を通り東北東に去る。県下では15、17日大雨あり総降水量は150mmから200mmくらいとなり、海上では風波高く、海陸とも災害を受ける。 愛媛県史概説	1925	1	最大風速宇和島 SW 12.2m
昭和	3. 8. 29 30	台風(740耗)29日夜半種子島を経て、豊後水道を北上し30日6時佐田岬を通り広島、松江を経て日本海に入る。この台風は強烈であり、降水量は29日1日で南予及東予で200mm内外、海上の風速は30m/秒近くの暴風となり防波堤の破損、崩壊、河川のはん濫など特にはなほだし。 愛媛県史概説、気象台資料	1928	3	宇和島最大風速 ENE 19.8m 総降水量 212mm  28、29日暴風雨発動船いたむ 町見郷土誌(阿部記録)

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
大正	3. 6. 2	大暴風雨、芋苗大いたみ植え付け不能麦、豆など皆風にとらる。 町見郷土誌(阿部記録)	1914	2	
大正	3. 9. 14	台風(730耗)14日朝四國西部に上陸し、方向を北東に転じ、同日松山附近を通過、瀬戸内海、中國地方を経て日本海に出る。海岸地方では高潮による被害が多かった。 愛媛県史概説、気象台資料	1914	0	八幡浜附近降水量 200mm  大風雨居宅大いたみ 町見郷土誌(阿部記録)
大正	4. 9. 8	台風(720耗)8日大隅半島に上陸し、同夜九州北部を通過し、中國西部を経て日本海に出る。風による高潮あり(総降水量宇和島279mm) 愛媛県史概説、気象台資料	1915	1	大浪浜通り破壊す 町見郷土誌(阿部記録)  八幡浜市は大黒町新町、近江屋町一帯浸水す 愛媛県史概説
大正	7. 7. 12	台風(720耗)12日豊後水道を通過し、山口県を経て日本海に出た。この台風は勢力も強く県下全般に暴風雨となり、大災害を受けた。この暴風雨で損害を受けた。県費支弁の各種工作物すなわち国、県道、河川堤防、海岸の被害額は概算10万円。 愛媛県史概説、気象台資料	1918	2	最大風速松山S 21.0m  八幡浜附近総降水量 200mm 7月12日より3日間大雨大浪浜の家まで潮うち上げ道路いたむ 町見郷土誌(阿部記録)
大正	9. 8. 15	台風(745耗)14日朝土佐沖に達し、15日、四國西部を通過、瀬戸内海より北東に進路を変え日本海に入る。この台風は東予および南予で降雨多く特に南予の御荘では15日224mm16日247mm17日117mmの連続降雨に見舞われ大山津波起こり多数の死傷者を出した。 愛媛県史概説	1920	2	松山最大風速NE 85m

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
昭和	9. 9.21	室戸台風 (680耗) この台風は13日パラオ島の南東海上に発生し、初め北西に進路をとりしだいに発達し19日夜半沖繩島の南東約 150 Kmの海上に達す。ここより進路を北東に変え21日3時に足摺岬沖の海上を通過し同5時には室戸岬の西方より四国に上陸した。室戸岬測候所では5時10分最低気圧 648耗を観測した。この気圧はこれまで陸上で観測された最低気圧の世界新記録である。それより台風の原因は淡路島、大阪を通り同日夕刻には金華山沖に出た。この台風は前記のごとく未曾有の大台風であった。 愛媛県史概説、気象台資料	1934	1	宇和島の気象 最低気圧 731.0耗 最大風速 NE 9.6m 総降水量 132.0mm (伊方観測所記録) 総降水量 154mm 19日夜9時頃より台風襲来す。 21日台風は午前8時頃静穏となる。 20日の日雨量 125mm
昭和	10. 6. 3	強風(低気圧) 西日本一帯に南東の風強くなり雨をともしけ模様となり被害を起した。宇和島では当日最大風速の記録出る。 愛媛県史概説	1935	1	宇和島最低気圧 747.0耗 最大風速 E 31.7m 伊方雨量 16mm
昭和	10. 8.28	台風 (720耗) 28日 17時ごろ足摺岬附近より四国に上陸し徳島県西部を通って北東に去った。県下では28日にかけて暴風雨となり災害を受けた。 愛媛県史概説	1935	0	宇和島最低気圧 729.6耗 最大風速 N 21.5m 総降水量 246mm 伊方雨量 132mm
昭和	10. 9.25	台風 (716耗) 24日 昼ごろには宮崎沖50Kmの海上にあったが、後ゆっくり北に進み同日夕刻には急速に衰え730耗となり、同夜半足摺岬に上陸し愛媛県東部、岡山県を経て日本海に出る。24日から25日にかけて暴風雨となり相当の災害を受けた。 愛媛県史概説	1935	0	宇和島最低気圧 738.1耗 最大風速 W 16.4m 総降水量 196mm (伊方観測所) 総降水量 241mm 24日、日雨量 105mm NE風力4

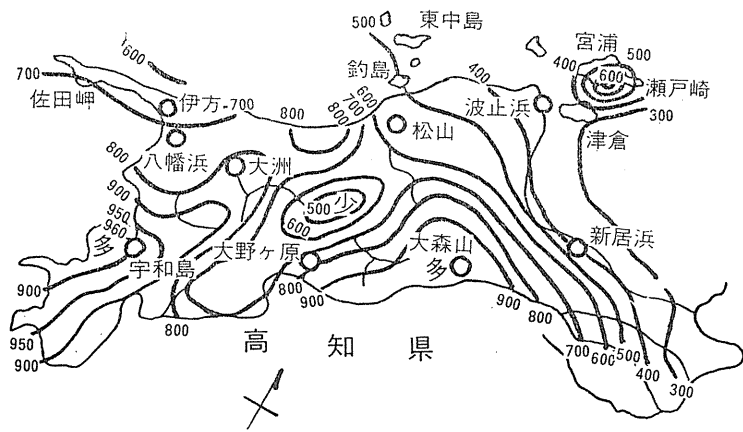
年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
昭和	5. 8. 12 13	台風 (692耗) 11日 奄美大島を経て12日九州西岸近くの海上を北上し、13日に日本海に入る。宇和島附近で200mm(降水量) 風力は陸上で10mから15m海上では20mで風水害を受ける。 愛媛県史概説	1930	2	宇和島最大風速 SW 4.7m 伊方観測所記録 総降水量 69.8mm
昭和	6. 10. 13	台風 (730耗) 13日朝 九州南部をかすめ、正午足摺岬を通過し室戸岬を経て紀伊半島に上陸する。海上の風力は15mを越し風水害を受ける。 愛媛県史概説、気象台資料	1931	1	宇和島最大風速 ENE 10.8m 総降水量 105mm 伊方総降水量 72mm
昭和	7. 8. 11 12	台風 (700耗) 9日4時 気圧 703.9耗に下り、風速は50m程度となりその後北に進行し、この台風が日向灘にまで進んで来た。11日ごろより九州の東南海岸および四国の南岸は激浪に襲われた。12日より15日まで日向灘沖に停滞気味で示度もしだいに浅くなり16日東海道に沿って北東に去る。本県では10日から12日にかけて南予および山岳地方に200mm内外の降水あり。 愛媛県史概説	1932	1	伊方総降水量 74mm 風向NE 風力 4
昭和	8. 10. 20	台風 (720耗) 20日朝 九州の比崎に上陸し宮崎西方を通り愛媛県を通過し瀬戸内に入り北東に去る。雨量は少なかったが風力強く高波と高潮を伴い、八幡浜より今治海岸部にかけて被害が出た。 愛媛県史概説、気象台資料	1933	1	宇和島の気象 最低気圧 735.2耗 最大風速 E 18.6m 伊方総降水量 74mm 風向NE 風力4 台風襲来す

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
昭和	18. 7. 21 24	台風(740耗) 22日 18時には室戸岬南方 500Kmの海上に達し、23日ごろまではほとんど停滞気味で24日 748耗と衰え愛媛県を北上して日本海に出た。この台風と不連続線の活動により九州東岸四国および中国地方では21日から24日にかけて降雨連続し、記録的な暴風雨となった。 愛媛県史概説	1943	1	(伊方観測所記録) 21日より大降雨降り続き河川決壊、山崩家屋流失、埋没田畑流失等大被害あり 降水量 21日 140mm 22日 160mm 23日 274mm 24日 98mm 計 672mm
昭和	18. 9. 20	台風(700耗) 20日 6時に鹿児島沖を通り高知県宿毛市 附近より四国に上陸し岡山鳥取を経て21日日本海に出た。県下では19日より風雨が強くなり20日は暴風雨で全般に風水害を受けた。 愛媛県史概説	1943	0	宇和島最低気圧 731.3耗 最大風速 E 19.7m 伊方観測所記録 総降水量 455mm 19日、日雨量 296mm 20日午前10時頃より暴風雨となる。

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
昭和	12. 9. 11	台風(713耗) 11日朝、四国足摺岬附近に上陸し清水測候所では台風の眼に入り5時10分最低気圧 711耗を観測している。同日9時岡山を経て鳥取県東部を通過し日本海に出た。10月11日は暴風雨となり大被害が出た。 愛媛県史概説 気象台資料	1937	2	宇和島最低気圧 728.1耗 最大風速 W S W 21.9m 伊方総降水量 104.1mm 10日夜半より11日にかけて暴風雨。
昭和	16. 8. 15	台風(720耗) 15日早朝 土佐沖から同沿岸に上陸し四国中国を北に進み日本海に出た県下では11日から小雨が降り始め、14日夜より暴風雨となり16日まで続いた特に東予および南予でははなはだしかった。 愛媛県史概説	1941	4	宇和島最低気圧 730耗 最大風速 W 9.3m 伊方降水量 36mm 暴風雨、風向W風力4
昭和	16. 10. 1	台風(720耗) 11日11時 鹿児島湾を通り九州南部に上陸間もなく北東に転向してしだいに衰えながら広島県から鳥取県西部を通り日本海に出た。海上は暴風となり大災害を受けた。 愛媛県史概説 気象台資料	1941	0	宇和島最低気圧 734.3耗 最大風速 S S E 21.9m 伊方総降水量 187mm 1日午後3時40分風力5暴風雨となる。
昭和	17. 8. 27	台風(700耗) 27日 6時に奄美大島附近を通りここから北北東に転向し九州北西部を経て28日、日本海に出た。27、28日にかけて暴風雨となり降水量多く大災害を受けた。 愛媛県史概説 気象台資料	1942	1	宇和島最低気圧 741.6耗 最大風速 E 14.9m 伊方総降水量 204.5mm 26日、日雨量 100mm
昭和	17. 9. 21	台風(710耗) 27日 正午過ぎ足摺岬の東海岸より四国に上陸し、中国東部を経て若狭湾に抜けた。18日頃より雨が強くなり総降水量多く大被害を受けた。 愛媛県史概説	1942	0	伊方総降水量 185.0mm 20日午前2時頃より暴風雨となり午後3時頃静になる。

昭和18年7月20~25日

雨量図



(図2)

自然

昭和年 (西暦)	期間 (月日)	種類	原因	最大風速 (m/秒)		雨量			主被害 な地	町内の主な 被害等	摘要
				宇和島	佐田岬	県 最 日	下 大 量	伊方町 総降 水量			
22 (1947)	4.21	強風	季節風	21日 WNW 23.3	21日 NW 26.1			—	県下全般	伊方観測所記録 午後北西風強く3 ~4(風力) 午前10時半より小 雨あり。	
22 (1947)	12.14	季節風		14日 NW 14.5				1.0	県下全般	伊方村日誌 12月11日大風新築 中の豊之浦小学校 大風のため倒壊 す。	
23 (1948)	10.5 ~6	暴風雨	台風 24号 (リビー)	6日 NW 24.0	5日 多喜浜 68.5			39.0	太平洋岸	伊方観測所記録 4日満潮時海岸一 帯浸水 6日午前2時頃よ り強風となる。	土佐沖東北 東進
24 (1949)	6.20 ~22	暴風雨	台風 2号 (デラ)	20日 ESE 19.0	21日 SE 38.5			101.0	九州・四 国・九 州	伊方村日誌 (21日)午前2時 頃よりの大暴風雨 のため日振島の漁 船(キンチャク網) 殆んど遭難し、村 内消防団全員出動 し救助作業を実施 す(遭難者126名 を救護す) (24日)県商工水 産委員、災害実地 調査、見舞のため 来村	中心示度 950ミリパ ール 薩摩半島に 上陸し九州 中部北上 特別記事 日振島漁船 遭難48隻 (乗員328 名)南予漁 村は潰滅的 打撃を受け た。
	7.15 ~19	暴風雨	台風 4号 (フェイ)	18日 SSE 12.2	17日 ESE 30.0	18日 大野ヶ 原 121.3		46.0	九州	伊方観測所記録 17日風力4 18日風力6 午前 1時頃より南西風 強まり暴風雨とな る。	17日九州西 岸北上

台風記録 (自昭和20年至昭和38年)

昭和年 (西暦)	期間 (月日)	種類	原因	最大風速 (m/秒)		雨量			主被害 な地	町内の主な 被害等	摘要
				宇和島	佐田岬	県 最 日	下 大 量	伊方町 総降 水量			
20 (1945)	9.15 ~18	暴風雨	台風 16号 (枕崎)	17日 SE 21.1	17日 ESE 50.0	17日 千足山 580.0		192.0	近畿以 西	伊方村日誌 (17日)19時過ぎ より暴風来襲、海 陸共にじん大なる 被害が予想され る。 (18日)昨夜来の 暴風雨被害じん大 家屋の全壊、半壊 船舶、宅地の流失 稲作その他農作物 樹木の折倒、道路 の破損等大なるも のあり。	中心示度 955ミリパ ール 枕崎~九州 東部~愛媛 県の北西端 通過 S.9 室戸台風と 優劣なし
	10.2 ~5	"	台風 19号		2日 SE 23.0	2日 伊方 102.0		157.5	中部地 方	伊方村日誌 3日朝方以来降雨 なるも8時頃より 10時の間大雨とな り水害を受く。役 場建物本月17日の 風害により瓦なき ため事務中止す る。	土佐沖北東 進
	10.7 ~11	"	台風 20号 (阿久根)	10日 SE 13.5	10日 SE 36.0	9日 小田町 370.0		403.0	近畿以 西	伊方村日誌 10日夜来北風強く 大雨降り続く。午 後やや弱くなるも 依然止まず、川は 増水甚しく込山方 面の土手を越ゆ。 夕方に至り漸く雨 止む。午後7時よ り雨が加わり大暴 風となる。	中心示度 955ミリパ ール 阿久根西方 より九州を 北北東に横 断
	7.28 ~30	"	台風 9号	29日 E 19.4		29日 神松名 212.5		158.0	四九 国州 中国	伊方村日誌 29日午後10時頃暴 風通過の予報あり 警戒手配したが甚 しき暴風波となら ず無事台風通過せ り、潮は稀に見る 高潮なりしも1、 2浸水家屋あるも 殆んど被害なし。	中心示度 960ミリパ ール 宮崎沖から 豊後水道過 中国地方北 東進

自然

昭和年 (西暦)	期間 (月日)	種類 原因	最大風速 (m/秒)		雨量		主被害 な地	町内の主な 被害等	摘要
			宇和島	佐田岬	県最大 日雨量	下伊方町 総降水量			
			27 (1952)	6.22 ~23	暴風雨 台風2号 (ダイナ)	23日 ESE 11.5			
28 (1953)	9.24 ~25	台風13号 (5313号)	25日 WNW 12.2	25日 NW 29.5	27日 瀬戸崎 253.2	87.1	西日本	町見村日誌 (24日) 台風警報(25日) 台風13号により県道3カ所崩壊す。	中心示度 920ミリバール 紀伊半島沿いに熊野灘北東進 高潮被害大
29 (1954)	8.18	台風5号 (5405号)	18日 NNW 20.5	18日 SE 32.5	17日 三間 334.0	48.1	九・州・中・国・四国	町見村日誌 (18日) 暴風警報発令あり。消防団出動 海岸 警備する。午後6時警報解除。 (20日) 床下浸水 家屋一斉消毒。	中心示度 940ミリバール 九州南部上陸 南予通過
	9.7 ~8	台風13号 (5413号)	7日 SSW 11.2	7日 SE 37.3	8日 野村 214.3	19.7	"	町見村日誌 (7日) 台風13号襲来夜半強風のため被害相当あり。	中心示度 950ミリバール 九州北上
	9.13 ~14	台風12号 (5412号)	13日 E 21.1	13日 SE 42.4	13日 兎ノ山 378.0	122.5	"	町見村日誌 (12日) 16時30分 気象警報発令 18時30分 暴風警報発令 (13日) 台風12号 暴風圏内に入りたるにより役場内に対策本部設置。 (緊急分団長会) (14日) 被害集計報告	中心示度 920ミリバール 九州北上 高潮被害あり。

昭和年 (西暦)	期間 (月日)	種類 原因	最大風速 (m/秒)		雨量		主被害 な地	町内の主な 被害等	摘要
			宇和島	佐田岬	県最大 日雨量	下伊方町 総降水量			
			25 (1950)	7.19 ~21	暴風雨 台風8号 (グレイス)	20日 SE 14.9			
9.3	台風28号 (ゴジ)	3日 WNW 13.2		2日 鈍川 129.0	23.0	四州・近畿	伊方観測所記録 3日午前9時頃より強風、風力6	3日朝四國東岸北北東進	
9.13 ~14	台風29号 (キジア)	13日 SSE 18.0		13日 SE 44.0	13日 下灘 391.0	298.1	九州・中・国・四国	町見村日誌 (13日) キジア台風午後11時頃より豊後水道を通過夜半より警戒を要す状態なり。 (14日) 昨夜来の被害状況調査関係方面に状況報告。	中心示度 940ミリバール 13日九州北上海陸ともに大災害を受けた。 12日の日雨量 166.0mm
26 (1951)	7.1 ~2	台風6号 (?)	2日 W 19.9	2日 NNW 30.2	1日 大保木 260.0	83.2	九州・近畿	伊方村の日誌 台風情報(暴風、豪雨、高潮)	足摺岬北東進
	10.13 ~14	台風15号 (ルース)	14日 SSE 26.4	14日 SE 67.1	14日 大保木 349.0	80.1	西日本	伊方村日誌 (14日) 午後9時頃より暴風雨となり10時30分~11時頃最高に達し伊方小学校講堂倒壊。 町見村日誌 14日暴風雨特報(松山13日発表) 今夜半から明朝にかけて県下全般は暴風雨圏内に入る。 (15日) ルース台風の被害甚大にして倒壊家屋多数。村長以下係員災地調査のため村内一巡。	中心示度 925ミリバール 14日夜九州北東進 伊方村床下浸水70戸、家屋全壊6戸、半壊120戸、船舶全損40隻半損51隻

自然

昭和年 (西暦)	期間 (月日)	種類	原因	最大風速 (m/秒)		雨量		主被害 な地	町内の主な 被害等	摘要
				宇和島	佐田岬	県最大 日雨量	伊方町 総降水量			
32 (1957)	9.6 ~7	暴風雨	台風10号 (5710号)	7日 W 14.5	7日 NNW 25.2	6日 佐田岬 228.8		全般	伊方町日誌 (6日)18時40分 暴風雨高潮警報発 令(台風14号) (7日)13時14分 警報解除。	中心示度 985ミリバ ール 豊後水道北 上宇和島附 近に上陸北 東進 風あまり強 くなく豪雨 による被害 大
33 (1958)	9.17 ~18	強風	台風21号 (5821号)	18日 NNW 9.0	18日 NNW 25.0	—		全般		
34 (1959)	8.7 ~9	風雨	台風6号 (5906号)	9日 WNW 15.5	9日 NNW 26.7	8日 兎ノ山 385.4	184.8	全般	漁港施設災害 護岸、堤防2カ所 防波堤2カ所、被 害額4,305千円、 床下浸水25戸、田 畑冠水15ha、田畑 流失0.2ha、漁船 の被害中破2隻、 小破10隻	
	9.6 ~17	風雨	台風14号 (5914号)	17日 ESE 18.0	17日 SE 37.3	17日 高 172.6		一部	漁港施設災害 護岸1カ所600千 円、漁船の被害中 破5隻、大破10隻	伊方町日誌 (17日)台風 14号の余 波で風雨強 し
	9.26 ~27	暴風雨	台風15号 伊勢湾	26日 WNW 14.0	26日 N 31.7			全般	港湾施設2カ所 510千円、家屋半 壊3、床上浸水5 戸、床下浸水50戸 水田冠水10ha	伊方町日誌 (26日)台 風15号の余 波で朝から 風雨強し
35 (1960)	8.28 ~29	風雨波浪高潮洪水	台風16号 (6016号)	29日 WSW 11.8	29日 N 23.5	下鍵山 28日 256.0		全般	(漁港施設)護岸 2カ所2,500千円 (港湾施設)護岸 3カ所620千円 (道路施設)道路 2カ所500千円 床下浸水15戸、田 畑冠水2ha、漁船 の被害4隻(小破)	

昭和年 (西暦)	期間 (月日)	種類	原因	最大風速 (m/秒)		雨量		主被害 な地	町内の主な 被害等	摘要
				宇和島	佐田岬	県最大 日雨量	伊方町 総降水量			
29 (1954)	9.25 ~26	暴風雨	台風15号 (5415号)	26日 SSE 27.7	25日 SE 27.5	25日 新立 290.0		全般	町見村日誌 (25日)台風15号 襲来。消防団警戒 出動す。 (26日)台風15号 襲来。被害じん大 重傷2名、軽傷2 名。	中心示度 960ミリバ ール 鹿児島県大 隅半島に上 陸し宮崎、 愛媛県を通 り日本海に 出る近來ま れにみる大 災害 洞爺丸沈没
30 (1955)	10.3 ~4	"	台風23号 (5523号)	4日 NE 24.4	4日 ESE 40.4	3日 中津 253.0		九州・四国・中国	伊方村日誌及支所 日誌 暴風警報発令。 台風23号来襲によ り夜半頃より暴風 雨となり(中心は 三崎町佐田岬)午 前6時頃通過し、 中国の西部に進み (以下略) 午後7時警報解除 引き続き注意報発 令。	中心示度 968ミリバ ール 豊後水道北 上
31 (1956)	9.9 ~10	"	台風12号 (5612号)	10日 S 20.4	10日 SE 39.5	3日 中津 253.0		九州・四国	伊方町日誌 (9日)18時台風 警報。22時台風襲 来 (10日)前夜に引 続き暴風となり、 午後一応平静とな る。雨量少なく潮 風のため農作物の 被害じん大。	中心示度 940ミリバ ール 九州西方北 上 西宇和郡に 高潮あり
	9.25 ~27	"	台風15号 (5615号)	27日 NE 10.3	27日 NNW 28.3	26日 吉野 184.0		太平洋側		中心示度 975ミリバ ール 土佐沖北東 進



自然

豪雨記録 (西暦1857~1963「106年」)

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
万延	1. 4. 5 (5.25)	霖雨不作 正月より4月5日(5.25)まで殆んど降雨続き麦不作。(新居郡誌)	1860	3	
慶応	2. 7. 1 (8.10)	洪水 7月1日(8月10日)洪水 (宇和島覚書)	1866	6	
明治	9.	大水害 明治9年に大水害ありしこと上記書類をここに摘録する。その損傷次の通り 荒茅 760 田反別20歩 明治9年ヨリ18年マデ10カ年季 山崩 松本新吾 浦安1761 田反別 9歩 明治9年ヨリ13年マデ5カ年季 流損 石投入 大沢伊勢松 秋津 166 田反別 4歩 明治9年ヨリ13年マデ5カ年季 流損 石投入 根来儀作外3へ 船付1376 田反別 17歩 明治9年ヨリ13年マデ5カ年季 水損 二宮軍治 岩見3700 田反別 28歩 明治9年ヨリ13年マデ5カ年季 水損 二宮十松 右者当村田損地取調候処相違無之候ニ付前書見込ノ年季ノ通御聞届被成下度此段願上候也。 と認めてある。これは県へ報告免租について願出た文書の中の一部である。 (町見郷土誌) 戸長役場当時の書類	1876	10	
明治	13. 7. 1	豪雨 7月1日 (摘要類函)	1880	14	

昭和年 (西暦)	期間 (月日)	種類	原因	最大風速 (m/秒)		雨量			主被害地	町内の主な被害等	摘要
				宇和島	佐田岬	県最大 日雨量	下大雨	伊方町 総降水量			
36 (1961)	5.28 ~29	強風	台風4号	15.4					南予	港湾施設 1カ所 507千円 人家被害10戸	中心示度 956ミリパー ル 伊方町日誌 (28日) 風 雨注意報16 時40分、風 はS W最大 10m~15m 海上は15m ~20m
	9.14 ~16	暴風雨	台風18号 (第2室戸台風)	16日 NNW 28.2	16日 NNW 43.0	2日 鹿森 128.2		109	中部以西	(港湾施設) 護岸 突堤3カ所 (漁港施設) 護岸 4カ所、防波堤2 カ所10,700千円 (建物の被害) 非 住家全壊20棟 床上浸水10戸 床 下浸水 200戸 水 田冠水3ha 船舶 被害13隻	中心示度 920ミリパー ル 伊方町日誌 (15日) 9 時波浪、暴 風、高潮、 洪水警報発 令(町対策 本部設置) 二見、九町 海岸高浪の ため避難し 始める。 (16日) 15 時警報解除
37 (1962)	8.21 ~22	風雨 波浪	台風13号	22日 S 10.0	22日 ESE 28.5	21日 伊方 79.0			南・東予	漁港施設 1カ所 800千円 家屋半壊 2.0戸	九州西部に 上陸し九州 を縦断し、 瀬戸内西部 を通り、中 國地方を横 断して東進
	8.27 ~28	強風	台風15号	28日 SSE 11.5	28日 ESE 24.5				南予		九州南方を 北上し宮崎 県沿岸を通 り衰えて熱 低となり佐 田岬を経て 広島県へ
38 (1963)	8. 9 ~10	暴風雨	台風9号 (6309号)	9日 E 17.2	9日 ESE 29.2	9日 東之川 388.0			全域	道路欠壊 10カ所 500千円 漁港防波堤、護岸 3カ所 2,350千円 水田冠水15ha	

自然

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
明治	35. 9.28	豪雨 21日から27日まで瀬戸内を東西にのびる前線があり、県下は小雨が連続した。28日雨方に現われた台風により前線活動が活発となり豪雨となる。県下全般に総降水量は 200mm以上となり水害を被る。	1902		
明治	41. 8.10	豪雨 9日山陰沖に前線あり降雨があったが前線の南下にともない、松山では10日15時より雷雨となる。中予から南予にかけては比較的、短時間に 100mm前後の強雨となり水害を受く。 (愛媛県史概説)	1908	6	
明治	43. 8. 8 ~13	大雨 8月8日より5日間大雨 町見郷土誌 (阿部記録)	1910	2	
大正	4. 6.25	豪雨 24日上海附近より低気圧北上し日本海に出るに及んで県下に豪雨をもたらす。肱川流域で 200mm(中略)以上の降水があったが被害の詳細不明。 (愛媛県史概説)	1915	7	
大正	7. 7.20 ~24	大雨 7月20日より24日まで大雨大風、土用に入りてより大雨ばかり9日大風引大流行死者多し。 町見郷土誌 (阿部記録)	1913	3	
大正	8. 7. 4	豪雨 7月1日ごろから梅雨前線が停滞し、降雨が続いていたが、4日日本海に低気圧が出るに及んで前線の活動がさかんになり豪雨を見る。(中略) 南予で 100mm前後となり水害を受ける。 (愛媛県史概説)	1919	4	
大正	9. 6.27	豪雨(低気圧) 27日6時九州南西沖に達し、北東に転向して瀬戸内海に入り、松山附近を通過す。このため(中略)八幡浜、宇和島方面に集中被害があった。 (愛媛県史概説)	1920	1	6月1日より7月1日までに5日天気ありしのみ粟まきかえ多したかきびくさる。 町見郷土誌 (阿部記録)

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
明治	18. 6. 7	豪雨 6月7日大雨 (愛媛県史概説) (松山市史)	1885	5	
明治	23. 7. 1 ~ 4	豪雨 7月1日から4日に至る間低気圧瀬戸内海に停滞し、1日から連続降雨、3日は県下は豪雨となった。 (愛媛県史概説) (松山測候所資料)	1890	5	米凶作・米価値上り (新居郡誌) 雨多く稲作陰らざ (愛媛県誌稿)
明治	33. 4.11	強雷雨 愛媛県西部および高縄半島に強雷雨発生50mm~60mmの強雨降り低地浸水す。	1900	10	
	33. 7. 7	豪雨 4日より西日本降雨8日に至るまで連続降雨あり、水害を受く。 (東予200mm、中予150mm)			
	33. 7.15	豪雨 梅雨前線活動により14日から20日にかけて連続降雨し、特に15日は前線上に強雷雨発生、降雨も激しかった。水害を受く。 (東予200mm、中予300mm) (愛媛県史概説)			
明治	34. 6.30	豪雨 梅雨前線上に21日以降低気圧連続来襲し、降雨続いたが特に30日は豪雨となり県下全般に総降水量は200mmから300mmに達し水害を受く。	1901	1	
	34. 7.14 ~15	豪雨 梅雨前線上に低気圧の発生多く特に14日15日連続大雨で県下に水害を与えた。 総降水量275mm 八幡浜158mm (愛媛県史概説)			
明治	35. 7.20	豪雨 16日より20日にかけて梅雨前線活動により連続降雨を見る。特に20日は豪雨となり(中略)八幡浜地方は大水害を受く。(総降水量東予で 200mm前後中部で 150mm~200mm) (愛媛県史概説)	1902	1	

自然

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
昭和	7. 7.21	豪雨 低気圧の北東進により7月2日朝本県東部を通過し東予及南予で100mmから200mmの豪雨となり水害を受けた。 (愛媛県史概説)	1932	4	伊方観測所記録 総降水量 111mm
昭和	8. 4 25 ~26	豪雨(低気圧) 25、26日にかけて瀬戸内附近に豪雨をもたらした。この雨は松山周辺に多く150mmに達した。 (愛媛県史概説)	1933	1	伊方観測所記録 総降水量 57mm
昭和	10. 6.26 ~30	霖雨 南方からの湿った気流により降った気流性降雨である。25日より降雨となっていた。27日低気圧の衝撃によって西日本に連続大雨を降らせ、本県でもかなり水害を受けた。総降水量は南予に多く400mmを越した所もある。 (愛媛県史概説)	1935	2	伊方観測所記録 総降水量 300mm (26日~30日)
昭和	13. 7. 3 ~ 5  13. 7.31 ~ 8. 1	豪雨 梅雨前線を小低気圧が通過したため本県は3日から5日にわたり豪雨が降り災害を受けた。(宇和島降水量90mm) 豪雨 瀬戸内海を東西に不連続線が走り数日来降雨連続していたが30日748帯低気圧が九州西岸に近づくに従って前記の前線は活動を開始し、31日から1日にかけて豪雨となる。被害甚大であった。 (愛媛県史概説)	1938	3	伊方観測所記録 総降水量 70mm  総降水量 263.0mm
昭和	17. 6.14	豪雨 13日から14日にかけて南高北低の気圧配置で愛媛県の北西部で気流性降雨が強くなり総降水量は松山附近と八幡浜附近で180mmとなり水害を受けた。 (愛媛県史概説)	1942	4	伊方観測所記録 総降水量 162mm

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
大正	9. 8. 9	豪雨(低気圧) 沖縄方面に発生した低気圧と朝鮮海峡に発生した低気圧は二つ玉となり東進し、西日本は雷雨性豪雨に見舞われた。総降水量は南予および山岳部で200mmを越し被害があった。			
大正	10. 6.14 ~17	豪雨 6月9日より連続降雨があったが、14日より前線活動活発化し雨勢強くなり17日は県下全般に100mmを越す豪雨となり、14日から17日までの総降水量は300mmから400mmに達し大きな水害を受けた。 (愛媛県史概説)	1921	1	
大正	12. 7.11 ~12	豪雨 気圧配置は梅雨末期の豪雨型で11日梅雨前線は瀬戸内海附近にあったが、低気圧に刺激されて活発となり県下に豪雨を降らす。 (愛媛県史概説)	1923	2	
大正	15. 7. 3 ~6	豪雨 梅雨前線活動により3日から6日にかけて降雨続き、特に3日は南予に100mmを越す豪雨あり。また6日に中東予に100mmから200mmの豪雨あり水害を受けた。(愛媛県史概説)	1926	3	
昭和	2. 8.26	豪雨 小笠原高気圧と千島方面の高気圧の間にできた不連続線は本州を東西に走り、活動が活発となり26日夜から27日朝にかけて県下全体に雷雨性の豪雨あり(石槌山系の総降水量300mm河川はん濫) (愛媛県史概説)	1927	1	
昭和	3. 6.25 ~28	豪雨 6月19日より梅雨気味の天気で降雨連続し、25日から28日にかけて豪雨となり、大洲町、八幡浜町周辺では総降水量400mmを越し被害発生す。 (愛媛県史概説)	1928	1	6月28日豪雨、田畑浸水の危険に瀕す 町見郷土誌(阿部記録)

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
昭和	30. 6. 18 ~19	豪雨 18日夕刻から19日にかけて西日本に停滞していた梅雨前線が活発に活動し比較的短時間に県下各地で100mmから150mmに達する豪雨があり、かなり被害を受けた。(愛媛県史概説)	1955	2	大雨注意報解除 (6月19日8時50分) (伊方町日誌)
昭和	31. 6. 30 ~7. 3	豪雨 この期間梅雨前線の活動が活発で、6月30日から7月1日にかけての豪雨でかなり被害があった。(愛媛県史概説)	1956	1	7月1日大雨注意報 16時40分 (伊方町日誌)
昭和	32. 7. 2	豪雨 1日から7日まで梅雨前線が西日本に停滞して雨天が続いたが、特に2日は前線の活動が活発となり100mm前後強の雨が降り水害が出た。(愛媛県史概説)	1957	1	(伊方町日誌)
昭和	33. 7. 2 ~3	大雨 梅雨前線 県下最大2日今治日雨量 126.3mm 主な被害地、四国・九州 (気象台資料)	1958	1	
昭和	34. 7. 13 ~16	大雨 梅雨前線 県下最大日雨量15日宇和島 44.4mm (気象台資料)	1959	1	14、15、16日雨 (伊方町日誌)
昭和	35. 6. 21 ~22	大雨 低気圧梅雨前線 県下最大日雨量 宇和21日 206.0mm 主な被害地、中予・南予 (気象台資料)	1960	1	道路決壊1方所 150千円 床下浸水5戸、水田冠水1ha (町資料) 21日日雨量 120mm 連続降雨量 187.5mm (伊方中学校観測所)
昭和	36. 6. 8 ~9	大雨 梅雨前線 県下最大日雨量 大洲91.2mm (9日) 野村81.4mm (気象台資料)	1961	1	8、9日雨 9日7時30分大雨注意報発令 9日10時30分大雨洪水注意報 (伊方町日誌)

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
昭和	23. 8. 26	豪雨 (熱帯低気圧 1.000ミリバール) 26日3時九州西岸に接近し、熊本附近に上陸し東北東に進み、この低気圧の通過後、四国南岸に停滞していた前線は活発になり、西日本は豪雨に見舞われた。本県で25日から26日にかけて豪雨があり、総降水量は兩予で300mm (中略)となり水害を受けた。(愛媛県史概説)	1948	6	25、26日雨 (伊方村日誌) 伊方観測所記録 総降水量 196.0mm
昭和	26. 7. 12 ~15	豪雨 低気圧が九州西岸に接近するにつれ、本州南方洋上にあった梅雨前線は北上し引き続き停滞していたため、7日より降雨始まり12日から15日かけては前線活動が特に活発となり、強雨が続き県下全般に大水害を受けた。(愛媛県史概説)	1951	3	14日豪雨警報(午後7時) 15日豪雨被害甚大なり (伊方村日誌) 14日昨夜来の豪雨による被害倒壊家屋住宅3非住家2 (町見村日誌) 伊方観測所記録 総降水量 296.7mm
昭和	27. 7. 2 ~3	豪雨 梅雨前線が停滞し、活発な活動をしたため、西日本各地でかなり豪雨があり、本県も相当の災害を受けた。	1952	1	伊方観測所記録 総降水量 53mm
	27. 7. 10 ~11	豪雨 梅雨前線は四国南岸を東西に走り停滞していたため、本県では8日ごろより降雨が続いていたが、10日から11日にかけて前線は幾分北上し活発になったため総降水量 200mm前後の豪雨となり、大水害を受けた。(愛媛県史概説)			10日昨夜来の降雨のため二見小島平早返50m決壊す (町見村日誌) 伊方観測所記録 総降水量 107mm
昭和	28. 6. 25 ~29	豪雨 梅雨前線北上により17日より連日降雨していたが、25日前線は活発となり県下でも同夜から26日から豪雨となった。27日やや小降りとなったが、28日午後から再び大雨となり近年まれな被害を起した。総降水量は兩予で最高 500mmに達した所もあった。(愛媛県史概説)	1953	1	6月26日豪雨のため村内各所に被害あり。夜間奥、向部落で浸水甚だし消防団70名出動 (町見村日誌) 伊方観測所記録 総降水量 374.5mm

自然

干ばつ記録 (西暦1857~1963「106年間」)

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	町内の記録
慶応	1.	干ばつ 干ばつにして水論各地に起る。 (新居郡誌)	1865	—	
慶応	3.	干ばつ 大干ばつ稲作不振 (新居郡誌)	1867	2	
明治	8.	干ばつ 6、7月干ばつ (東宇和郡沿革史)	1875	8	
明治	16.	大干ばつ 大干ばつ、赤痢流行す。 (新居郡誌)	1883	8	
明治	26. 6.25 ~ 8. 4	大干ばつ 6月25日より夏型の気圧配置継続し暑熱の天気となり8月4日まで降水量は寡少で松山では41日間に20mmであった。 (愛媛県史概説)	1893	10	24、25、26年干ばつうちつづく。赤痢流行。 町見郷誌(阿部実蔵氏記録)
明治	27. 7.26 ~ 8.31	大干ばつ 夏型気圧配置が持続し、県下の降水量は微量で水不足のため稲作および農作物等にじん大な被害があった。(松山37日間降水量16mm、蒸発量195mm) (愛媛県史概説)	1894	1	
明治	30. 7.22 ~ 8.18	干ばつ 夏型の気圧配置続き、炎暑の天気持続し28日間の降水量は南予沿岸地方で24mm以下(中略)県下水不足に悩まされる。同期間の松山の蒸発量172mm。 (愛媛県史概説)	1897	3	
明治	36.6.~9	大干ばつ 36年3月より5月まで雨、それより9月まで94日間大干ばつ。 町見郷土誌(阿部実蔵氏記録)	1903	6	

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要			
昭和	37. 6. 7 ~10	大雨 梅雨前線 県下最大日雨量 9日高浦 81mm 県下の主な被害地 全域 (气象台資料) (県土木10年史)						
昭和	37. 6.12 ~16	大雨 梅雨前線 県下最大日雨量 13日七番 95mm 県下の主な被害地 東予・南予	1962	1	7. 3~5 豪雨 (伊方中観測) 3日日雨量85mm 連続雨量250mm 道路決壊3カ所 610千円 床下浸水5戸、水田冠水1ha			
	37. 6.24	大雨洪水 梅雨前線 県下最大日雨量 21日御荘 240mm 県下主な被害地 南宇和郡西宇和郡						
	37. 7. 1 ~ 6	大雨 梅雨前線 県下最大日雨量 5日久万 98mm 県下主な被害地 全域						
	37. 7. 7 ~ 8	大雨 梅雨前線 県下最大日雨量 8日御荘 93mm 県下主な被害地 南予・中予 (県土木10年史)						
昭和	38. 4.28 ~ 7月 中旬	長雨 (4月28日連続降雨が梅雨につながった。) 県下最大日雨量 6月13日大森山168mm 麦は明治以来の不作、柑橘野菜にも大被害、農林水産関係損害見積額1,700万円(異常天候降水日数49~66日であった。) (県土木10年史)	1963	1	農作物被害(麦、果樹、養蚕、蔬菜等)110,000千円 天災融資法の適要を受けた被害農家 低利融資 10,000千円 (町資料)			
昭和	38. 6.13 ~14	風雨洪水(台風3号6303) 県下最大日雨量七番 225mm 佐田岬最大風速 NNW19.3m			町道決壊5カ所 1,350千円 床下浸水50戸  単位 mm			
		伊方中観測雨量	11日	12日	13日	14日	計	日
			15.0	18.0	22.0	60.0	115.0	雨量

自然

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	町内の記録
		た。 (伊方村役場記事)			ヲ生ジ枯死スルモノ 続出シ收穫皆無 ノモノ勘ナカラサ ル状態」 「甘藷、 柑橘、梨、大豆、 小豆、里芋、茄子 茗茄ノ被害頗ル激 甚デ收穫皆無ノ モノアル」西宇和 諸作物生産総額 1,979,000円、同 被害額 1,420,000 円、7割以上ノ激 減。 。11項目の旱害 対策陳情、署名者 43名。
昭和	14.7.~8	干ばつ 気圧配置は7月始 めより夏型状態となり、近 年まれに見る干ばつとなっ た。本県でも東予、中予で 特に著しく、農作物に多大 の干害が出た。 松山の降水量7月24mm、8 月34mm。 (愛媛県史概説)	1939	5	昭和14年4月より 伊方気候観測所は 宇和島観測所管下 となる。
昭和	22.	干害 9月17日干害調査の ため郡支部 食糧 検より来 村。 (伊方村日誌)	1947	8	
昭和	26.7.21 ~ 8.16	21日梅雨明け後は小笠原高 気圧の張り出しが強くなり 夏型の晴天持続し、南予沿 岸部(中略)では無降水日 27日を記録し、水不足に悩 まされ、甘藷その他の畑作 に相当の干害を受けた。 (愛媛県史概説)	1951	12	
昭和	27.7.21 ~ 8.31	干ばつ 小笠原高気圧の張 り出しが強く、好天が続き 多少の降雨もあったが、全 般に雨量少なく畑作に干害 を受けた。 日照りに悩む八幡浜山間部 では真夜中に水汲みをし た。 (愛媛県史概説)	1952	1	

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	町内の記録
大正	3.7.14 ~ 8.21	干ばつ 南方高気圧におお われ、暑い晴天が続き総降 水量は20mm(中略)と僅少 であるに対し蒸発量は242 mmで農作物被害多し。 (愛媛県史概説)	1914	11	
大正	11.5.23	大干ばつ	1922	8	11年5月23日より 大干ばつ米価大い にあがる。今年8 月1日まで大干ば つ。近村一日中大 雨請。 町見郷土誌(阿 部記録)
大正	14.	大干ばつ	1925	3	大干ばつ50日ぶり に雨を見る。 町見郷土誌(阿 部記録)
大正	15.7.8 ~ 8	干ばつ 7月8日より8月 にかけて夏型の気圧配置卓 越し降雨少なく干ばつとな る。南予、東予では水不足 を来し、農作物特に甘藷、 蔬菜類の畑作不作となる。 (松山8月降水量41mm、蒸 発量 174mm) (愛媛県史概説)	1926	1	
昭和	4.7.10 ~ 9.19	干ばつ この期間夏型天気 卓越し多少の降雨日はあっ たが雨量少なく、稲作その 他全般にわたって水不足に 悩まされた。甘藷不作であ った。 (愛媛県史概説)	1929	3	昭和4年10月1日 より松山測候所管 下となり伊方気候 観測所業務開始す る。
昭和	9.7.27 ~ 8.30	干ばつ 7月27日以来夏型 の天気続き、8月に入って 数日降水あったが、平坦部 では雨量少なく干ばつとな る。 (八幡浜降水量6mm) (愛媛県史概説)  この年の 繭 価 低落、崩落 (春蚕)した。 干ばつは桑樹枯死し秋蚕、 晩秋蚕は 飼 育 不能となっ	1934	5	S9.9.1 旱害対策 共同陳情書(西宇 和郡町村長会)会 長浦中友治郎、伊 方村長佐々木隆孝 町見村長井田与 平「60年来ノ旱魃 ニシテ池水河川ノ 流水全ク枯涸シ植 付不能ノモノ多ク 植付ヲ了シタモノ モ其ノ後打続ク旱 天ノタメ田面龜裂

自然

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	町内の記録
昭和	35. 7. 6 ~ 8.11	干ばつ 太平洋高気圧 (気象台資料) 7.6~8.11までの総降水量 3.8mm (伊方中学校観測所)	1960	1	33年度につぐ干ばつで植付完了後の作物も枯死寸前の状態となり果樹においても落葉し果実の成育は停止した。また飲料水にしても3日に1回の時間給水でがかる。被害面積713.3 被害金額47,833千円(金額被害率40%) 干害応急対策国庫補助事業費 4,113千円(町資料)
昭和	36. 7. 1 ~ 7.28 8. 1 ~ 8.15 8.28 ~ 9.13	干ばつ 高気圧による天気 持続 (伊方資料) 7.1~9.13までの総降雨量 27.0mm (伊方中学校観測所)	1961	1	干害応急対策国庫補助事業費 3,186千円 干害応急対策県費補助事業費 1,005千円 計 4,191千円 (町資料)
昭和	37. 8.10 ~ 8.29 9. 5 ~ 10.10 10.13 ~ 10.30	寡雨(干ばつ) (気象台資料、伊方町資料) 8.10~10.30までの総降雨量 30.0mm (伊方中学校観測所)			干害応急対策事業(国費) 4,729千円 干害応急対策事業(県費) 1,032千円 計 5,761千円 野菜など干害、秋まき野菜の種まき期おくれる。 (町資料)

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	町内の記録
昭和	28. 7.23 ~ 8.27	干ばつ 23日より小笠原高気圧の影響で炎暑の天気が持続し、8月27日までの36日間に中予、東予では降水量20mm以下で湯水で飲料水不足した所もあり、畑作および夏かんに干害が出た。 (愛媛県史概説)	1958	5	28年8月1日より町見中学校気象観測開始す。
昭和	33. 7.23 ~ 8.27	干ばつ 高気圧 8月1日伊方町で雨乞い祈願(本文の項参照) (愛媛県土木10年史、町資料) 7.11~8.12までの総降水量 7.3mm  区分 昭和5年 ~32年ま で平均降 雨量 mm 昭和33年 降水量 mm 4月 219.6 143.0 5月 149.4 126.4 6月 336.3 81.9 7月 244.83 19.5 8月 130.1 57.5 計 980.23 428.1 (伊方中学校観測所)			干害対策県費補助事業 820千円、被害面積 596.5ha 被害金額55,815千円、被害農家戸数 2,134戸、要救済農家 625戸 救農土木建設、失業対策事業(干がい農家特別対策)開始する。 (注)干害本文参照
昭和	34.	干ばつ 僅少) (梅雨異変、雨量) (伊方町資料)	1959	1	6月24日現在 甘藷種付総延面積 289.5ha (全面積の85%程度) (伊方町資料)  町内各部落で雨乞いの行事を実施し八幡神社で各部落総動員で、「大雨乞い」を行なった。(7月7日4時より開始、6時より降雨) (伊方町日誌)



## 自然

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	備考
昭和	2. 1.25	大雪	1927	4	
	2. 2. 7 ~ 9	大雪 百年ぶりの大雪 町見郷土誌（阿部実蔵年 代譜相場控簿）			
昭和	3. 12.	大雪 町見郷土誌（阿部実蔵年 代譜相場控簿）	1928	1	
昭和	20. 1. 17	大雪 積雪5寸（15cm） （伊方村日誌）	1945	17	
昭和	23. 1. 26 ~ 29	雪 1月26、28、29日降雪 （伊方村日誌）	1948	3	
昭和	31. 1. 9	大雪 バス不通のため、町見吏員 は支所勤務 （伊方村日誌）	1956	8	1月7日~9日強 風（季節風） 宇和島風速7日N W17.4 佐田岬〃 7日 NW18.4 （気象台資料）
昭和	32. 1. 18 ~ 19	強風と積雪（季節風） 宇和島NW14.0m、佐田岬 NW19.5m（最大風速） 県下の主な被害、南予のバ ス路線寸断さる。 積雪20cm。 気象台資料（愛媛県土木 10年史）	1957	(1) 29	
昭和	33. 1. 21 ~ 24	強風と大雪（寒冷前線、季 節風） 最大風速23日 佐田岬28.9 m、宇和島15.7m バス路線寸断 気象台資料（愛媛県土木 10年史）	1958	1	

## 豪雪記録（西暦1857~1963「106年間」）

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	備考
明治	14. 10. 30	早雪 別子鉱山辺に初雪降 る。土地の昔今頃雪の降る と聞きし事なしと。 愛媛県史概説（明治編年 史）	1881	—	
明治	16. 5	雪雹 5月愛媛雪雹 愛媛県史概説（日本気象 資料）	1883	—	
明治	40. 2. 11	大雪 10日沖縄方面より北 東進した低気圧により、大 雪となり、愛媛県でも30cm 前後の大雪となる。県下積 雪状況・松山34cm 宇和島 15cm 宇和24cm （愛媛県史概説）	1907	—	
大正	2. 2. 10 ~ 11	大雪 10. 11日大雪 積む こと8寸（24cm） 町見郷土誌（阿部記録）	1913	6	
大正	6. 1. 3 ~ 4	大雪 大風大雪 積むこと 7寸（21cm） 町見郷土誌（阿部実蔵年 代譜相場控簿）	1917	10	1月3、4日大風 大雪積むこと7寸 （21cm） 町見郷土誌（阿 部記録）  1月7日より雪ふ りやまず、2月14 日に至る。 町見郷土誌（阿 部記録）
	6. 2. 4	大雪 3日20時50分より降 雪始まり、4日はM40年2 月11日以来の大雪となる。 電灯線、電話線に着雪し、 経1寸から3寸に及び電話 線の切断したもの多く、不 通箇所30カ所及ぶ。松山の 積雪18.4cm （愛媛県史概説）			
大正	12. 2. 26 ~ 27	大雪 26、27日の両日大雪 8寸（24cm）以上つもる。 町見郷土誌（阿部実蔵年 代譜相場控簿）	1923	6	

自然

## 地震と津波記録 (西暦605~1963「1358年間」)

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
推古天皇	13.	地大に震ひ温泉(道後)陥没す。 大日本地震史料(東宇和郡沿革史・道後温泉誌)	605	—	
推古天皇	36.	推古天皇36年大地震にて温泉塞り3年を経て舒明天皇3年9月に再び出ず 伊予温古録(温泉伝記)	627	22	
天武天皇	12.10.14	12年冬10月巳卯朔、壬辰、遼子人定大地震拳闘男女叫唱不知東西、即山崩河湧、諸國郡官舎及百姓倉屋寺塔神社破壊之類不可勝数、由是人民及六畜多死傷之、時伊予温泉没而不出、古老曰若是地動未曾有也(以下略) 大日本地震史料(日本書紀)	684	57	
明応	3.5.7	大地震ありて被害多し (新居郡誌)	1494	180	
明応	4.8.15	大地震ありて被害なし (新居郡誌)	1495	1	
明応	7.6.11	大地震あり、地入り又は土地陥没の所多く黒島の如きは一番烈しく土地大に陥落崩壊し面積4分の3を失い住民四方に避散せり、(以下略)(黒島は今の新居浜市にあり) (新居郡誌)	1498	3	
享祿	4.	享祿4年大地震して湯桁を埋む、河野道直命して更に湯桁を改築し(以下略) 伊予温古録(温泉伝記) 10月河野道直道後温泉の浴槽を改造す 伊予史年表(伊予金石文)	1531	33	

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	備考
昭和	34.1.15 ~18	強風と大雪(季節風) 最大風速 17日W21.7m (宇和島)16日N23.7m (佐田岬) 海陸交通寸断、列車止る。 果樹農作物の雪害2億円、 水道管破裂(南予) 積雪 最深大洲63cm 気象台資料(愛媛県土木 10年史)	1959	1	17日 積雪25~30cm、交通機関杜絶 18日 積雪35cm 交通機関杜絶 19日 雪解け始める 船舶のみ交通開始 バス路線不通 (伊方町日誌)
昭和	35.12.29 ~36.1.4	強風と大雪(西高東低の気圧配置) (主な被害地) 強風は全般、雪害は中南予予讃線列車30日頃から一部乱れる。南予のバス30日から混乱、1月3日より一部復旧、5日平常に戻る。 西宇和郡の夏柑被害大 最深積雪 伊方52cm 気象台資料(愛媛県土木 10年史)	1960	1	30日 大雪 31日 大雪 (交通杜絶す) (伊方町日誌)
昭和	36.1.1 ~1.4	積雪(寒冷前線) 西宇和郡を中心として夏柑に大被害あり。 約1億8千万円の損害があった。 気象台資料(愛媛県土木 10年史)	1961	1	1日 大雪とけず 交通不通 2日 県道の雪ブルトナーにて除雪する(土木事務所) 3日 雪とけ始める 4日 積雪のため夏柑の枝折れ等被害じん大 (伊方町日誌)
昭和	38.1.	豪雪・低温(寒冷前線) 最大風速 宇和島18日NW 24.2m、佐田岬21日N29.8 m主な被害地、山間部・南予果樹、野菜に大打撃 (気象台資料)	1963	2	夏柑等被害額 70,000千円 天災融資法の適用を受けた。 (伊方町記録)

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
寛永	2. 3. 18	地震にて塞る。松山城主蒲生忠知命して湯神社に祈祷す。後日の如く湧出す。 松山叢談（前項にあり） 伊予温古録（温泉伝記）	1625	11	
寛永	7. 11. 5	7年11月5日地なりふいて泉脈閉塞す。 大日本地震資料（道後温泉誌）	1630	5	
慶安	2. 2. 5	要約記事「伊予、安芸両国地大に震ひ、宇和島、松山の二城石壁崩れ、広島にては（以下略）」 （大日本地震資料） 慶安2年2月19日松平隠岐守在所予州松山より飛脚到来し申云、今月5日、当所大地震に付城の石垣20間、塀30間余崩之由也（中略） 20日夜伊達遠江守在所予州宇和島より飛脚到来して云今月5日当所大地震、廻りの石垣116間、長屋塀780間破損仕る由注進あり。 （寛明日記）	1649	19	
貞享	2. 12. 4	12月4日大地震道後湯没す御城郭の内敷力所崩る。 大日本地震資料（津田家記）	1685	36	
貞享	3. 12. 10	要約記事（安芸地大に震ひ家屋倒潰するもの多く、（中略）長門及び伊予にも被害あり） （大日本地震資料） 貞享2年12月10日地震に泥湯湧出後清湯となる。 伊予温古録（温泉伝記）	1686	1	
元禄	1. 5. 23	5月23日強震3回あり。 大日本地震資料（宇和島御記録抜書）	1688	2	
元禄	7. 5. 25	閏5月25日伊予國大地震火事 大日本地震資料（続日本王代一覽）	1694	6	

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
天文	2.	橋神宮神社新居郡洲之内村字矢倉下にあり、（中略） 天文2年地震並高潮に潰没し同年今の地に遷宮せり（以下略） 伊予温古録（橋新宮神社記）	1533	2	
天正	13. 11.	11月大地震あり （新居郡誌）	1586	53	
文録	4. 7	鶴岡八幡神社、周桑郡北条村（現壬生川町）に在り（中略） 文録4年7月震災のため社殿悉く陥没す（以下略） 伊予温古録（鶴岡八幡神社記録）	1595	9	
慶長	1. 7. 12	豊後地大に震ひ、府内近傍は津波の襲う所となり、瓜生島の大部沈下して海水に被われ、死者708名を生ず （大日本地震資料） 薬師寺は（今の松山市余土）（中略） 慶長元年閏7月大地震の時本堂仁王門崩るる由いひ伝ふ 伊予温古録（薬師寺記録）	1596	1	
慶長	9. 12. 16	要約 東海・南海・西海の諸道地大に震ひ、大津波を伴い、土佐及び阿波突喰にて溺死するもの夥し（以下略） （伊予の文献なきも当然相当の影響ありと推測される） （大日本地震資料）	1905	9	
慶長	19. 10. 25	大地震にて山崩れ 泉脈塞がる 伊予温古録（温泉伝記） 慶長19年甲寅10月25日、寛永2年2丑3月18日、共に地震あり湧出せず、其後月を越て又出で初の如し （松山叢談） 伊予國地震ひ、道後温泉一時湧出を止む （大日本地震資料）	1614	9	

## 自然

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
安政	4. 8. 25	25日辰下刻松山大地震右御届被差出右に付家中へ米米の内知行 100石に付15俵ずつ割合を以御下米有之 松山叢談（池内家記） 強震息まざる事七昼夜、地元民競々として厩に安んぜず家を閉して竹林に避難せる。 （新居郡誌）	1857	3	
明治	38. 6. 2	震度5であり主なる被害地は松山、温泉、越智、伊予の各郡、（中略）震央地は安芸灘 （气象台記録）	1905	48	傷者16名、家屋全壊7戸、半壊58戸 破損231戸、橋梁破損2カ所、堤防破損153カ所 （全資料）
明治	40. 8. 7	震度4、震央地・豊予海峡愛媛県西宇和郡強震被害あり。 （气象台資料）	1907	2	
昭和	21.12.21	震度4、震災地・南海道死者27名、傷者28名、全壊家屋1,133戸県下海岸線は地盤沈下のため平均40~50cm沈下、道後温泉湧出止まること半年に及ぶ。 （明治以降震度4以上の地震は17回に及び、そのうち震度5は2回である。） （气象台資料）	1946	39	
昭和	35. 5. 24	津波（チリ沖地震） （气象台資料）	1960	14	（5月24日） 大平洋岸津波警報発令される。消防団警戒体制に入ったが当町には被害なし。 （5月25日） 午前6時45分津波警報解除となる。 （伊方町誌）

年号	年月日	文献抄録	西暦	間隔	摘要
宝永	4.10. 4	要約記事（五畿七道に亘り地大に震い、続いて九州の南東部より伊豆に至るまでの沿海の地は悉く津波の襲う所となり、（中略）震災全部を通じて家潰れ29,000戸、死者4,900人に及べり。また土佐にては地形、変動を生じたる如あり。） （大日本地震資料） 本月4日大地震に付御城内所々破損、夫々委託田503町2反1畝歩、家屋其他数々流失、死人8人、半死24人右夫々委託有之公儀へ御届申遣 伊達家城内日記（宝永4年12月12日）	1707	13	
享保	1. 9. 12	元年9月12日朝強震あり。 大日本地震資料（宇和島御記録抜書）	1716	9	
寛延	2. 4. 10	4月10日四ツ時地大に震う宇和島城城楼破損、其他被害多し。 大日本地震資料（宇和島御記録抜書）	1749	33	
明和	6. 7. 28	八ツ時半、強震あり。 大日本地震資料（宇和島御記録抜書）	1769	20	
文化	9. 3. 10	3月10日より15日まで地大に震う。損害多し。 大日本地震資料（松山概要）	1812	43	
安政	1.11. 5 ~ 7	安政元年11月4日江戸大地震、同5日松山大地震、7日同断、松山御城内を始め家中並郷町被損左の通り。本丸石垣孕2カ所、同所塀屋根瓦壁落、二の丸塀屋根瓦壁同断、同所石垣孕1カ所（中略）道後村温泉絶（翌年2月末より温泉如旧湧出） 松山叢談（池内家記）	1854	42	